

### Ⅲ 岡田遺跡における弥生時代後期「十王台式」の集落跡について

#### 1. はじめに

ひたちなか市域では、武田遺跡群と船窪遺跡群において、区画整理事業に伴う大規模な発掘調査により、弥生時代後期「十王台式」の集落跡も、その全体が一気に捉えられることになった。一方、岡田遺跡については、個人住宅建設に対応する部分的な発掘調査を繰り返すことにより、情報が徐々に蓄積されてきている。本稿では、20 次を数えた既往の調査を概括し、「十王台式」の集落跡としての岡田遺跡について、現在までの知見を提示する。

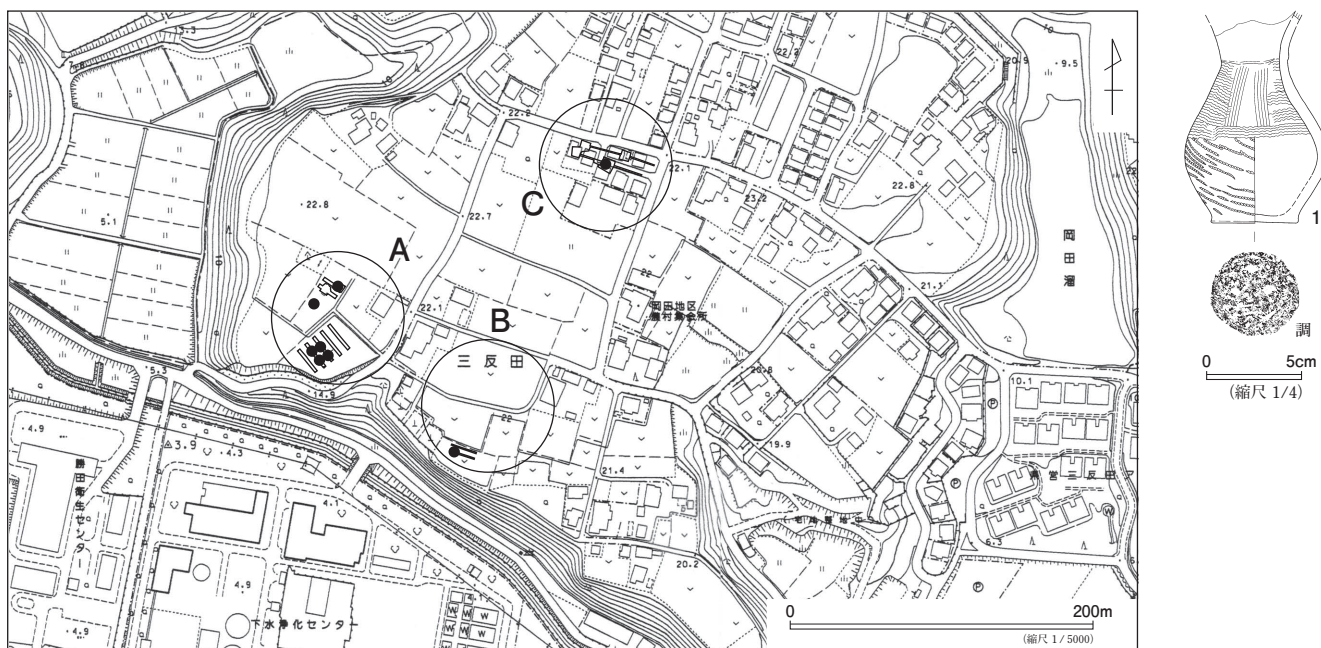
#### 2. 集落跡としての岡田遺跡

弥生時代の遺跡としての岡田遺跡は、1975 年の『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』<sup>註1</sup>が初出である。これは、勝田市史編纂事業が実施した分布調査の成果を基礎とした報告であるらしい。「時期は足洗式、東中根式、十王台式に及び遺物の散布は 100 × 300 m 位に及ぶ。足洗式土器の散布地は小規模であるが、十王台式土器は広い領域に分布し、遺物も濃密に散布しているといえよう」[川崎他 1975] と記載されている。拓影図が掲載された 12 点の土器片は全て「十王台式」。1979 年の『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』には、「採集される弥生

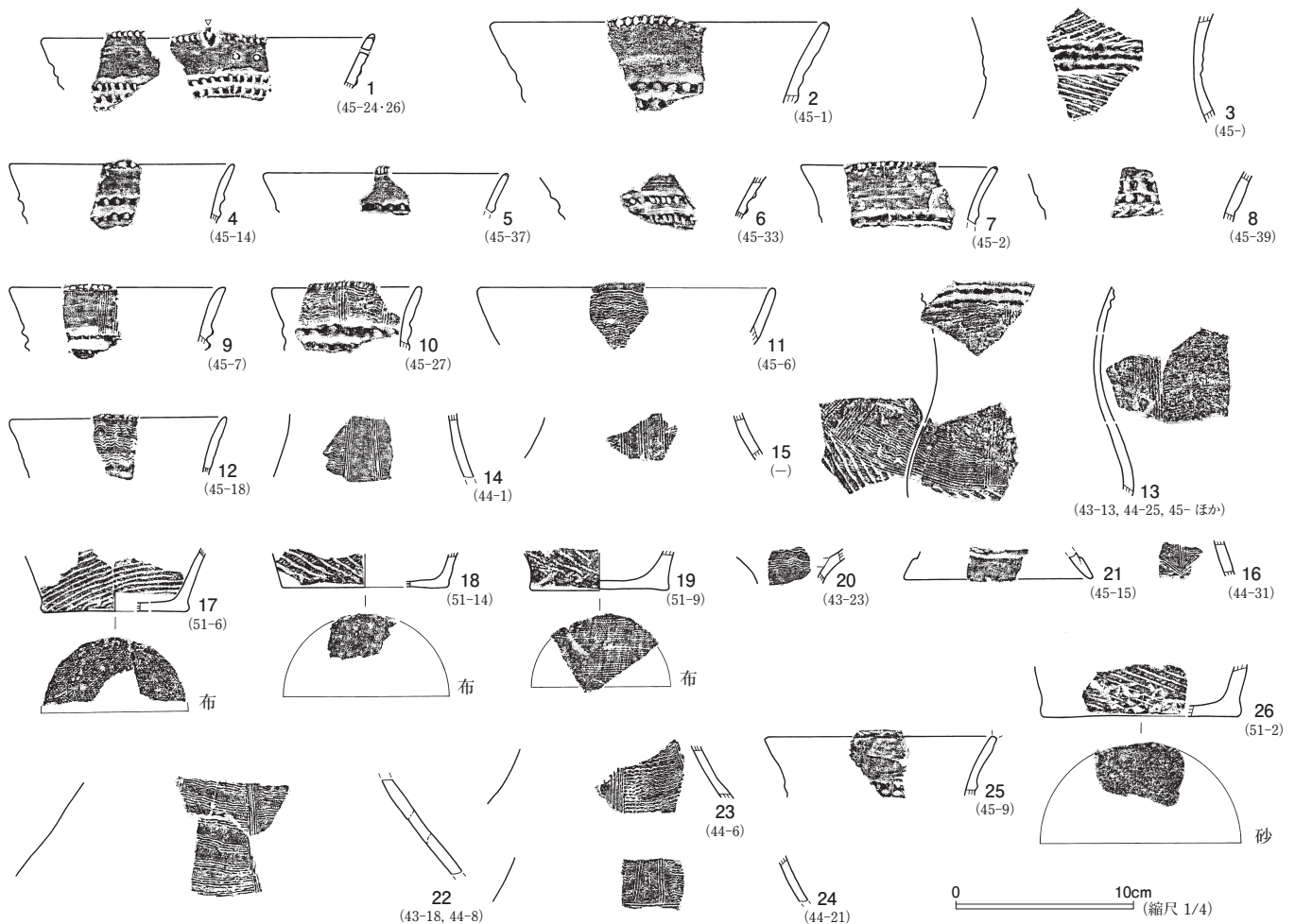
式土器片は足洗式、東中根式、十王台式に編年される。足洗式土器は台地縁辺部に営まれ、土器の散布は濃密ではなく、400 ～ 500 m<sup>2</sup>ほどの小さな散布地である」「東中根式土器と十王台式土器の分布はほぼ一致するようになる。土器片の散布は広範囲であり、濃密に分布している。台地縁辺部に数個所の竪穴状の落ちこみが認められており、遺物は落ちこみと思われる個所を中心にして十王台式土器片が採集されている。おそらく集落跡であろう」[川崎 1979] と、さらに詳しく記述された。11 点の土器片が再び掲載されるとともに、超小型の壺形土器（第 55 図 1）が実測図で報告されている。

1982 年の試掘調査を第 1 次として 2012 年度に第 20 次を数えた岡田遺跡の発掘調査は、分布調査で推定された「十王台式」の住居跡を検出し、当該時期の集落跡を確認している。また、「足洗式」も少量ながら検出された。しかし、「東中根式」については未だ確認できておらず、少なくとも、「十王台式」と分布が一致することはない。

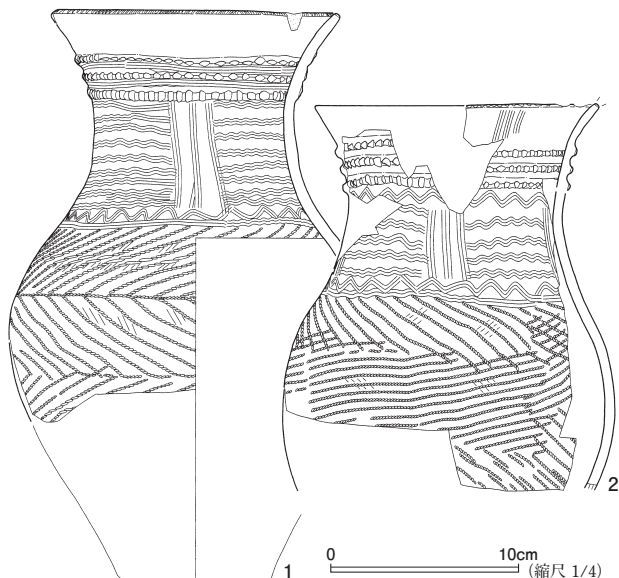
「十王台式」の住居跡は、第 2・6・12・18・19 次という 5 回の発掘調査で、合計 8 基が検出されている。広範囲と捉えられた土器片の分布に対応するように、住居跡は離れた地点にも位置する。但し、これは、広い



第 55 図 岡田遺跡における「十王台式」の住居跡の分布（黒丸が住居跡の位置）



第56図 岡田遺跡第2次調査（1983年度 A地点）出土遺物（括弧内は原報告〔住谷他1984〕の挿図番号）



第57図 「大畑式」の参考資料（茨城町大畑遺跡）

範囲に住居跡の分布が連続する大規模な集落跡が部分ごとに捉えられたということではない。「十王台式」の住居跡が検出されなかった他の調査区は、住居跡の分布に100mを超える断絶があることを十分に予測させる。「十

王台式」の集落跡としては、南東部の第2・12・19次調査地をA地点、南部の第18次調査地をB地点、北部の第6次調査地をC地点と細別しておきたい(第55図)。A地点とB地点は、中間に入る谷地形によっても区分される。

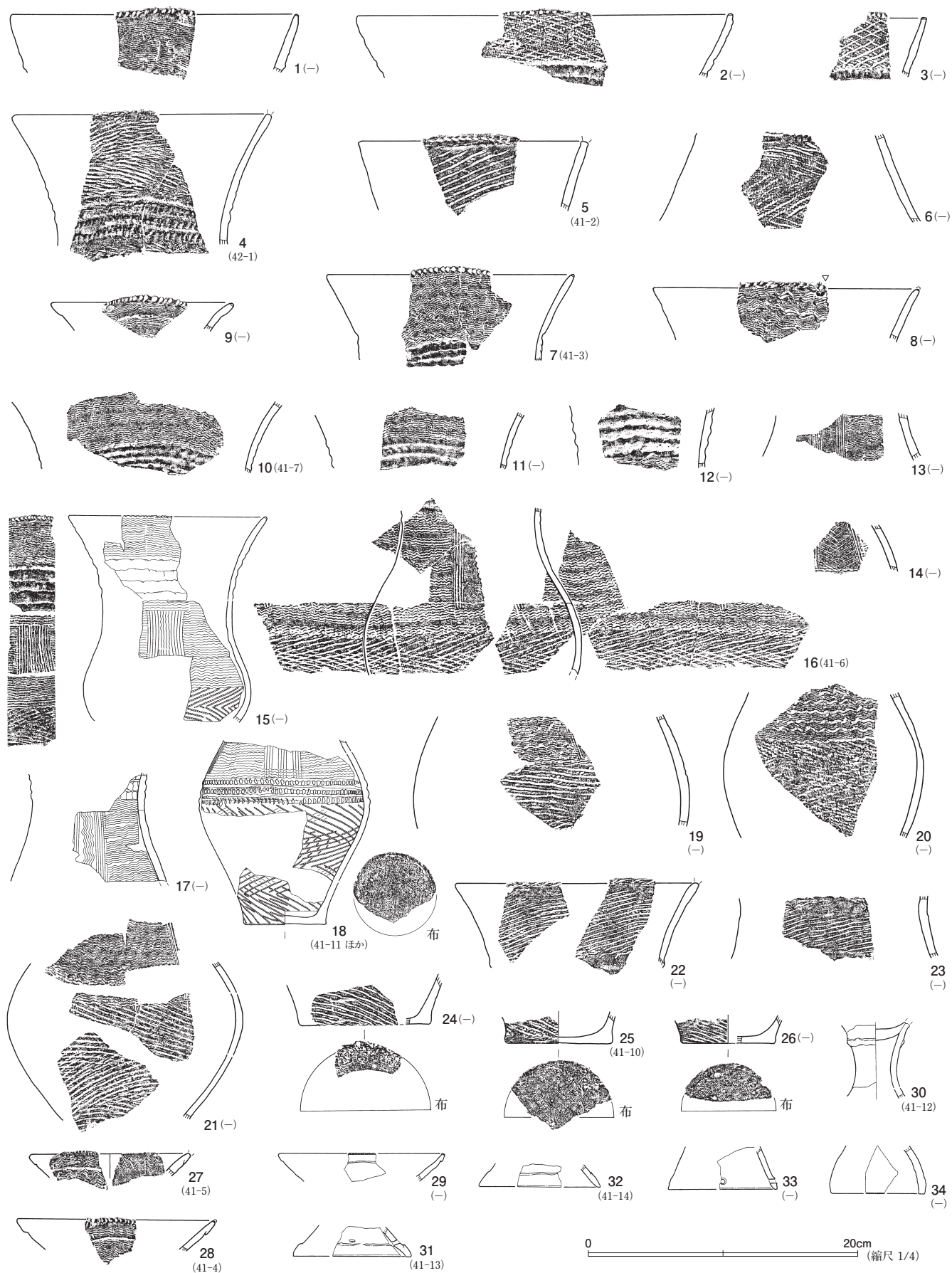
### 3. 各調査区の土器群

調査ごとに報告されていた遺物を観察し、一部を新たに実測して再報告する。「十王台式」については、武田・船窪遺跡群の分析を基礎とした細別〔鈴木2001・2002・2003・2004・2005〕によりながら記述している。

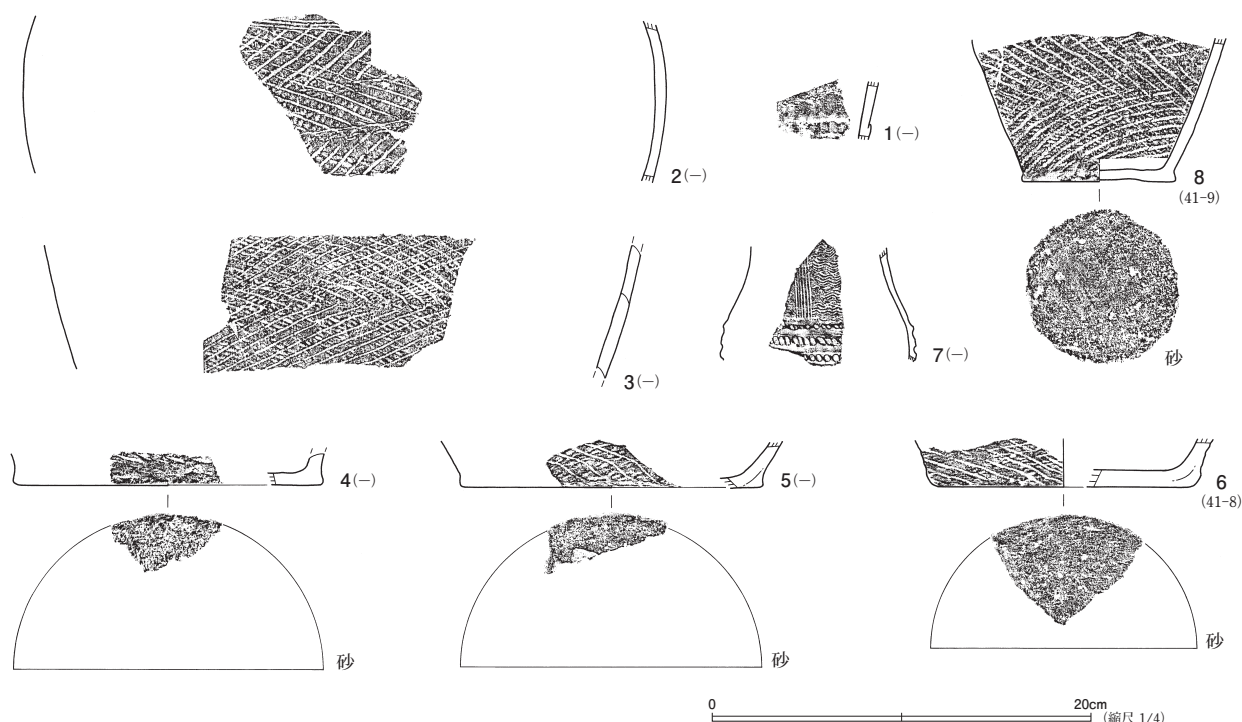
#### 第2次調査区（1983年度 A地点）の土器群

第1号住居址が「十王台式」の住居跡として報告されている〔住谷他1984〕。長軸4m、短軸3.5mほどの隅丸方形の平面形態である。炉石を伴う炉址が検出されている。攪乱のため支柱穴の配置などは明らかでない。

第56図1～21は、「大畑式」と「武田式西塙段階」



第 58 図 岡田遺跡第 12 次調査 (2006 年度 A 地点) 出土遺物 (1) (括弧内は原報告 [石井 2007] の挿図番号)



第59図 岡田遺跡第12次調査（2006年度 A地点）出土遺物（2）（括弧内は原報告〔石井 2007〕の挿図番号）



第60図 高坏形土器の成形痕跡（第58図30）

の土器群である。1～3が大型，4～19が中・小型の壺形土器で，20・21が高坏形土器。口縁部が無文の大型壺形土器は，他の調査区の「武田式西塙段階」には見られず，「大畑式」のものと捉えられる。1の口縁部には，焼成前の穿孔がある。中・小型壺形土器では，4の隆帯の下位に櫛描文の一部が残る。幅狭の口縁部に縦位の直状文のみが施された9，胴部の横位区画に3本櫛歯の工具で大振りの波状文が施された16とともに，これらは「大畑式」の典型（第57図）に一致する。6は，細頸形壺形土器と推定され，これも「大畑式」のものであろう。10～12は「武田式西塙段階」，他は「大畑式」もしくは「武田式西塙段階」。第56図22～26は，「富士山式」もしくは「小祝式糠塚段階」の土器群であり，胎土に金雲母を含有する。22は大型，23～26は中・小型の壺形土器。「小祝式」との並行関係から，「武田式西塙段階」は，「古期」として捉えられる。

#### 第12次調査区（2006年度 A地点）の土器群

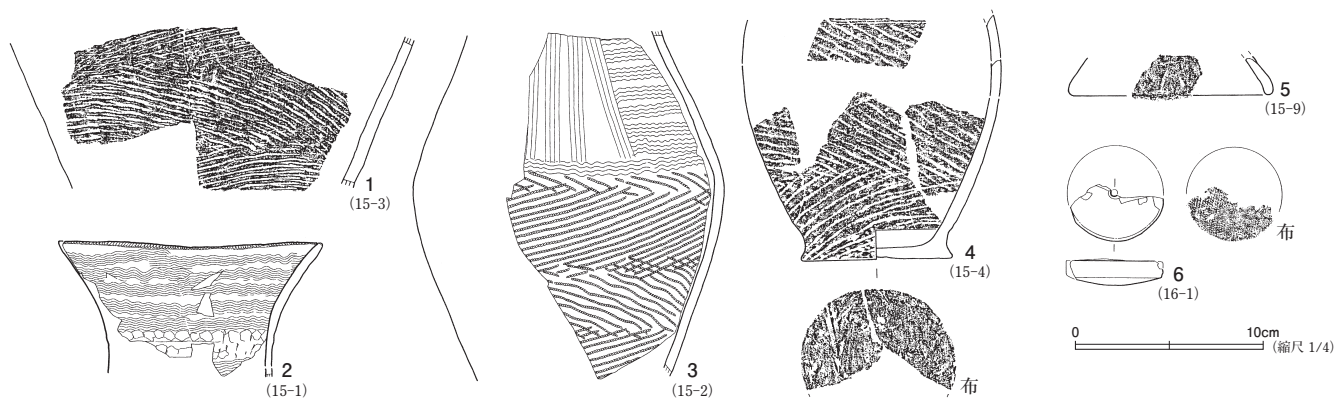
第1号住居跡が「十王台式」の住居跡として報告されている〔石井 2007〕。攪乱が著しく，平面形態と規模，支柱穴の配置などは明らかでない。床面から2基の炉址

が検出されたと報告されている。

第58図1～34は，「武田式西塙段階」の土器群である。1～6が大型，7～26が中・小型の壺形土器，27～34が高坏形土器。大型壺形土器には文様帯区画に2者があり，1～3は幅狭の口縁部が隆帯で区画されるのに対して，4・5には，これを欠く。口縁部の形態と口径も異なり，前者の法量がより大きいことが窺える。後者は，中・小型の縄文土器に文様構成が共通する。中・小型壺形土器にも，口縁部が無文のものは見られない。9は，細頸形壺形土器と推定され，口縁部が複合口縁であることから，「十王台式」の標本の1つ「紅葉」の特徴に一致する。8点の高坏形土器は全て個体が異なり，個体数の多さが際立つ。口縁部は複合口縁であり，櫛描文と無文とがある。30には，坏部の底面を脚部に接合した痕跡が明瞭に観察され，これは，「武田式」の成形技法の典型を示している（第60図）。第59図1～6は，「小祝式糠塚段階」の土器群であり，胎土に金雲母を含有する。1～6は大型，7・8は中・小型の壺形土器。中・小型よりも大型の個体数が多い。大型の口縁部は無文である。「小祝式」との並行関係から，「武田式西塙段階」は，「古期」として捉えられる。

#### 第19次調査区（2011年度 A地点）の土器群

第2・4・5・6号住居跡の4基が「十王台式」の住



第 61 図 岡田遺跡第 19 次調査 (2011 年度 A 地点) 出土遺物 ([佐々木他 2012] より引用して構成)

居跡として報告されている [佐々木他 2012]。トレンチに限定した遺構確認面までの試掘調査のため、住居跡の詳細は明らかでない。

第 61 図 1～6 は、出土位置から第 4 号住居跡の覆土中に含まれていたと捉えられる「武田式西塙段階」の土器群である。1 が大型、2～4 が中・小型の壺形土器で、5 が高環形土器。調査区内からは、「小祝式」の大型と中・小型の壺形土器の破片がそれぞれ 1 点出土している。6 は土製紡錘車であり、上面に布目痕が残されている。第 2 次調査区からも、同じような紡錘車が出土しており、これとは別個体であることを確認している。胎土とともに、布目痕が「武田式」の底面痕跡に共通することから、「武田式」に伴う紡錘車と考えられる [鈴木 2011]。

#### 第 18 次調査区 (2009 年度 B 地点) の土器群

第 2 号住居跡が「十王台式」の住居跡として報告されている。トレンチに限定した試掘調査で床面が露出し、「炉と思われる焼土の散布」が確認されている [佐々木他 2010]。

小破片のみではあるが、「武田式西塙段階」の土器群が検出されている。器種には、大型と中・小型の壺形土器、高環形土器があり、高環形土器は、口縁部に片口の付属が推定される。「小祝式」は出土していない。

#### 第 6 次調査区 (1996 年度 C 地点) の土器群

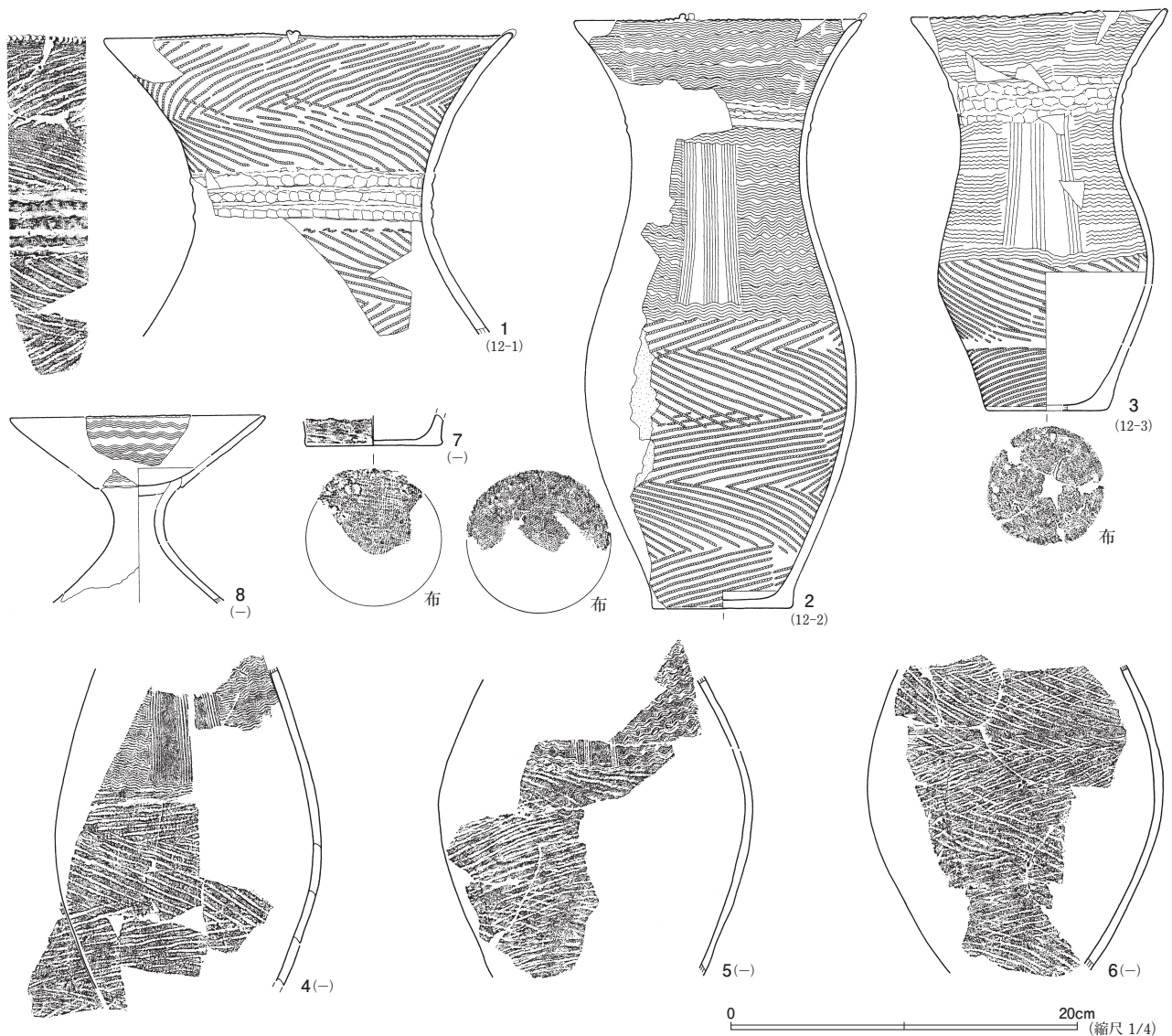
第 4 号住居跡が「十王台式」の住居跡として報告されている [鴨志田 1998]。トレンチに限定した試掘調査で床面が露出し、「炉と思われる焼土の散布」が確認されている。奈良・平安時代の第 5 号住居跡との重複、加えて攪乱により全体の規模は明らかでない。支柱穴の配置からは、長軸が 5 m ほどと推定されている。炉址は 2 基が検出され、うち 1 基には炉石が伴う。

第 62 図 1～6 は第 4 号住居跡、8 は第 5 号住居跡から出土したものではあるが、これも本来は第 4 号住居跡に所属したものと考えて良い。7 は調査区内から出土した。1 が大型、2～7 が中・小型の壺形土器で、8 が高環形土器。これらは、全て「武田式西塙段階」の土器群であり、「小祝式」は伴わない。

#### 4. 土器群に見る集落跡の形成

住居跡は未だ確認できていないが、岡田遺跡に隣接する東側の飯塚前遺跡 [鴨志田 1999] から「十王台式<sup>註2</sup>」、新平塙遺跡 [鴨志田 1998] から「大畑式」、西側の畠ノ原遺跡 [鴨志田 1992] から「武田式西塙段階」の土器片が出土している。これら 3 つの遺跡をも包括して岡田遺跡群と呼ぶならば、岡田遺跡群においては、分布調査の土器を含めても「小祝式梶巾段階」は認められない。現在までの知見からは、集落跡の時期が「十王台式」のうち「大畑式」から「武田式西塙段階古期」までと捉えられるのである。

「大畑式」からということは、ひたちなか市域において数少ない「十王台式古期」の集落跡ということになる。「十王台式古期」については、武田遺跡群の堀口遺跡 [鈴木 2001] で「薬王院式」もしくは「大畑式<sup>註3</sup>」、津田遺跡群の天神山遺跡 [伊東・川崎 1966] で「大畑式」もしくは「富士山式」と見られる破片が検出されているにすぎない。また、後期前半の「東中根式」が遺跡群を形成した東中根台地周辺では、「十王台式古期」の集落跡が確認されておらず、岡田遺跡には「東中根式」が確認できないことから、「薬王院式」を空白の時期として、集落跡の形成が東中根台地から三反田台地へと移り変わったと見ることもできる状況である。



第 62 図 岡田遺跡第 6 次調査（1996 年度 C 地点）出土遺物（括弧内は原報告〔鴨志田 1998〕の挿図番号）

「武田式西塙段階古期」までということは、ひたちなか市域の他の「十王台式」の遺跡群と比較して継続期間が短い集落跡ということになる。武田遺跡群、船窪遺跡群はともに「武田式西塙段階新期」さらに「武田式石高段階」まで継続し、古墳時代前期の集落跡も重複して形成されている。「十王台式」の遺跡群の成立を、生産基盤の水田を開発し、その周辺から離れずに集落の位置を移動させた軌跡として考える。岡田遺跡の範囲が 3 つの集落跡から構成され、さらに周囲にも同時期の遺跡群を形成するのは、短期間ではあっても、集落の移動があったことを示すのであろう。集落の断絶は、生産基盤の放棄であり、そうせざるを得なかった事情が、岡田遺跡には発生したのかもしれない。

## 5. おわりに

那珂川の河口付近においては、本流に臨む台地上に「十王台式」の空白地帯を見る。右岸では、河口から吉田遺跡群までの 10 km ほどに集落跡が確認されていない<sup>註 5</sup>。左岸の武田遺跡群までの距離は 8 km ほどである。6 km ほどの岡田遺跡群に認められた集落の断絶は、この地帯への進出が成功しなかったことによる。それは、那珂川の氾濫による洪水で生産基盤である水田に壊滅的な被害が生じたことによるのではないかと想定している。

三反田台地は、岡田遺跡が断絶した後、しばらく閑地のままにあった。そこに三反田遺跡という古墳時代前期の集落跡が出現する。「十王台式」が成し得なかった土地の開発を可能にする道具と技術を有した外来集団の入植へと、想像は向かうのである。

註1 「三反田」とのみ記載された土器が、1967年の伊東重敏により報告されている〔伊東 1967〕。岡田遺跡のものとも推定されるが、確実ではない。

註2 飯塚前遺跡については、胴下部の破片のみなので細別に至らない。

註3 堀口遺跡については、採集資料の中に「薬王院式」もしくは「大畑式」の胴部破片1点、さらに「富士山式」と見られる口縁部破片1点も確認できる〔鈴木 2001〕。

註4 津田天神山遺跡については、資料が観察できていないので、「大畑式」と「富士山式」の分別が確定していない。

註5 水戸市の旧・常澄村の範囲には、『常澄村史』に塩崎原・向山・原・金山・芳賀・道西の6遺跡が弥生時代後期のものと記載されているが、遺物は報告されていない〔佐藤 1989〕。執筆者の佐藤次男は、1952年の『考古学』第1巻第4号「北関東弥生式土器（遺跡）出土地名表」に、「稻荷村」（1955年の合併により「常澄村」）の遺跡として「汐ヶ崎貝塚附近・大串向山・大串小原・東前」・「栗崎」・「芳賀・六反田六地藏寺附近」の6地名を報告し、土器型式を「十王台」と記載していた〔佐藤編 1952〕。これらは、名称が変更されても、同一の遺跡と考えて良い。ところが、遺跡の細別時期を、佐藤は『常澄村史』に記述しなかった。それには理由があるに違いない。ひたちなか市埋蔵文化財調査センターに寄贈された「佐藤次男考古学資料」〔鈴木 2009〕には、芳賀遺跡（「栗崎」・「芳賀」）に相当する2点の土器片が含まれていた。また、「北関東弥生式土器（遺跡）出土地名表」にやはり「十王台」と記載されていた「酒門村」「谷田」「吉田」「吉田」工業学校附近の土器片も、それぞれ1点ずつ保管されている。観察してみると現在の知見からは、いずれも「十王台式」ではなく、「東中根式」など後期前半と捉えられるものである。なお、「東前」・「六反田六地藏寺附近」・「酒門村」「谷田」の文献として佐藤が掲げた後藤道雄の報告〔後藤 1949〕にも、「接触式の十王台式」という記載があるだけで、土器の挿図等は見られない。

## 参考文献

石井 篤 2007 『平成18年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（岡田遺跡第12次調査）

伊東考太 1967 「茨城の弥生式土器－その1－」『十王台式土器成立に関する試論－』『ひたちじ』6 3-7頁

伊東重敏・川崎純徳 1966 『津田・天神山遺跡調査報告』勝田市教育委員会

鴨志田篤二 1992 『平成3年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（畠ノ原遺跡）

鴨志田篤二 1998 『岡田遺跡発掘調査報告書－1997年度岡田遺跡発掘調査の成果－』ひたちなか市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第3集 ひたちなか市遺跡調査会（岡田遺跡第6次調査）

鴨志田篤二 1998 『新平塚古墳発掘調査報告書』ひたちなか市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第5集 ひたちなか市遺跡調査会

鴨志田篤二 1999 『飯塚前古墳発掘調査報告書』ひたちなか市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第9集 ひたちなか市遺跡調査会

川崎純徳他 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市文化財調査報告第1集 勝田市教育委員会

川崎純徳 1979 「岡田遺跡」『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市 133頁

後藤道雄 1949 「水戸東南台地の先史文化（上）」『史窓』第2号 39-52頁

佐々木義則他 2010 『平成21年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（岡田遺跡第18次調査）

佐々木義則他 2012 『平成23年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（岡田遺跡第19次調査）

佐藤次男 1989 「稲作農業のはじまり」『常澄村史 通史編』常澄村 76-96頁

佐藤次男編 1952 「北関東弥生式土器（遺跡）出土地名表」『考古学』第1巻第4号 5-17頁

鈴木素行 2001 「弥生時代後期の「武田遺跡群」「武田西塙遺跡」における十王台式土器の分析－「小祝式土器」と「武田式土器」の誕生－」『武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』公社文化財調査報告第21集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 3-7頁・406-433頁

鈴木素行 2002 「仙湖の辺－「武田式」以前の「十王台式」について－」『茨城県史研究』第86号 1-25頁

鈴木素行 2003 「ぼんぼり山遺跡における十王台式土器の分析－「小祝式梶巾段階」と「武田式西塙段階」の土器群－」『ぼんぼり山遺跡・貉谷津遺跡』公社文化財調査報告第27集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 113-125頁

鈴木素行 2004 「半分山遺跡における十王台式土器の分析－「小祝式梶巾段階」と「武田式西塙・石高段階」の土器群－」『半分山遺跡』公社文化財調査報告第30集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 209-225頁

鈴木素行 2005 「船窪遺跡における十王台式土器の分析－「武田式土器」の変遷－」『船窪遺跡』公社文化財調査報告第32集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 76-94頁

鈴木素行 2009 「佐藤次男考古学資料Ⅰ・Ⅱ（旧石器・縄文・弥生時代）」『ひたちなか埋文だより』第31号 2-4頁

鈴木素行 2011 「富士山のイモガイ－弥生時代後期における渦形石製品の成立と展開について－」『茨城県考古学協会誌』第23号 17-38頁

住谷光男他 1984 『昭和58年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会（岡田遺跡第2次調査）